



12月号

平成5年12月1日

発行／編集

岡崎市教育委員会

(蜜柑の祈り)

めぐりて秋  
蜜柑は今色鮮やかに実つて  
いる  
はしやぐあなたもまぶしい

初夏 甘酸っぱい香りを漂わせ  
精一杯咲く白い花の傍で  
はちきれんばかりの  
あなたの笑顔が弾んだ  
もう独りぼっちではない

冬 友と語りたい思いを  
心の奥底におし込め  
部屋の隅にうずくまる登校の朝  
いつかきっと  
歩み始める時がくる  
そう信じていたかつた

秋 窓ごしに  
黄色の蜜柑の実がみえる教室  
座られるあてのない  
一つの椅子は  
じつとあなたを待ち続けた

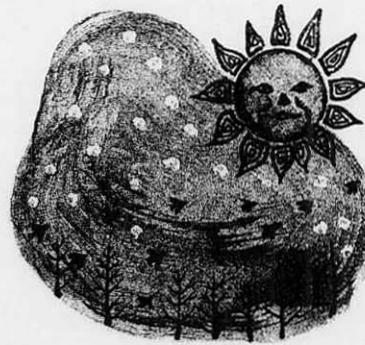


(ポストの秘密調べー愛宕小)

先日「道ひとすじ—昭和を生きた盲人たち」という本が出版された。これは、明治から大正年間に生まれ、昭和の時代に教育、福祉、職業からの経営に至るまでの幅広い諸分野で活躍し、盲人文化の向上と福祉の増進に寄与した百人の視覚障害者の活

存在であり、教育の力であり、またよき理解者、支援者の存在であったようだ。そしてさらに私の心を引きつけたのは、優れた指導者との出会いであった。「人との出会い」は人生創造の最大のエネルギーになつてゐるようである。

私は長年、盲学校教育に携わつて



### — 教育隨想 —

## 優れた指導者 との出会い



愛知県立岡崎盲学校長

中込 健

あれから四十数年経った今も、なぜかN先生と小黒板に書かれていたことばが鮮明な記憶として残っている。今自分の過去を振り返ってみると、N先生との出会いが私の人生創造のエネルギーになつていていたことに改めて気付き、感謝の気持ちでいっぱいである。

教師にはやるべき事が沢山あるが、学校を卒立つ生徒たちに生きる原動力となる感動を残してやることも大切だ。この感動は意識してつくり出せるものではなく、愛情ある人間的な触れ合いの中から自然に生まれてくるものであろう。私は冒頭で紹介した本の顔を思い浮かべながら、このようなことを考えると、残念にも首を傾げざるを得なかつた。

歌う喜びのある授業  
音楽科指導員  
鳥居 弘子



音楽への興味・関心は、音楽の良さや美しさを感受することにより、自らの持つ音楽的な体験と結びついたイメージや思いとなつて引き出される。それらのイメージや思いをさらに課題や意図などを明確にすることにより、自分なりの音楽としてよりよく味わい、表現しようとする意欲や態度へとつなげていくことが大切である。

躍歴を一編にまとめた画期的な伝記である。昭和は厳しい激動の時代であつたが、その荒波の中で視覚障害という大きなハンディキャップを克服して、逞しく生き抜いた姿が描かれている。さて、この活躍した盲人たちの人生であつたか。それは強烈な意志力の

私は四年間、長野県の木曾谷で、

きた一人として、視覚障害をもつた多くの卒業生を社会に送り出してきた。が、果たして、彼等に優れた指導者との出会いをどれだけ実感させることができたであろうか。卒業生の顔を思い浮かべながら、このようなことを考えると、残念にも首を傾げざるを得なかつた。

教師にはやるべき事が沢山あるが、学校を卒立つ生徒たちに生きる原動力となる感動を残してやることも大切だ。この感動は意識してつくり出せるものではなく、愛情ある人間的な触れ合いの中から自然に生まれてくるものであろう。私は冒頭で紹介した本の顔を思い浮かべながら、このようなことを考えると、残念にも首を傾げざるを得なかつた。

(なかごみ たけし)

生徒は曲にひたりながら感じたこ

## ふるさとシリーズ



## 長瀬楽人会

牛田 利吉 氏

現在の長瀬楽人会は、石川覚氏、杉山泰雄氏の二人が牛田利吉、上原久の両氏を勧誘し、昭和三十年一月一日に練習を開始したのを機に結成されたといつてよい。その後十名になつたが、三人他界されたので、平成五年十一月の時点では上原実氏、渡辺与市氏、石川伸夫氏を含めて会員数七名で運営している。悩みの種は、後継者不足とのことである。

牛田利吉さんは、最年長であることから電話の応対やスケジュールなど、打ち合わせの段取りをしてい る。石川覚さんは、重要資料を所蔵していることから収集・整理が担当である。杉山泰雄さんは、百年以上

生年月日 大正九年八月二十六日  
住 所 舟越町本郷八十八一一

長瀬楽人会の生い立ちは、百二十年程前の孝明天皇の御代、嘉永年間に遡つて始まつたようである。長瀬楽人会の一人石川覚氏所蔵の記録には、「舳越町願照寺十九代目住職の結城専修氏が、名古屋城から楽師を招聘し、舳越町を中心とした檀家の有志を集め、習わせるとともに、住職自ら雅楽を習得した」とある。

以来、子々孫々、先輩が友人を勧誘するなどの努力によって、伝統芸能としての雅楽は保存され、後継者が育成されてきた。十六人いたという先輩たちは、明治三年、宮内庁雅楽を使われる。太鼓類は、数十万円もし

部の師範「林左兵衛尉（笙）、東儀出雲守（簫篥舌）、東儀伊勢守（龍笛）」に師事、大正八年には旧尾張藩樂士佐藤慶次氏に師事している。

現在の長瀬楽人会は、石川覚氏、杉山泰雄氏の二人が牛田利吉、上原久の両氏を勧誘し、昭和三十年一月一日に練習を開始したのを機に結成されたといつてよい。その後十名になつたが、三人他界されたので、平成五年十一月の時点では上原実氏、渡辺与市氏、石川伸夫氏を含めて会員数七名で運営している。悩みの種は、後継者不足とのことである。

牛田利吉さんは、最年長であることから電話の応対やスケジュールなど、打ち合わせの段取りをしている。石川覚さんは、重要資料を所蔵していることから収集・整理が担当である。杉山泰雄さんは、百年以上前から雅楽を演奏してきた。現在も使用する名手である。上原久さんは、唯一舞楽のできる人である。練習は会員の家の輪番で行う。訪問当日は牛田家だった。談笑の後、各人が受け持つ楽器で、越天樂等の演奏を見聞きできて恐縮した。人生意気に感ずる姿に見えた。

雅楽の樂器は、主に太鼓、鉦鼓、

羯鼓、龍笛、簫篥舌、笙の六種類が

笛類は、個人所有である。それでも七種類ある。曲目数はそれぞれ平調調十九、壱越調二十三、雙調十五、黄鐘調十二、盤渉調十四、太食調十 四、高麗壱越調二十一あり、百十八曲になる。これらを樂人会結成以前から各人がこつこつと精写（写譜）し、それを教本として練習を重ねてきている。

次に、それぞれがイメージした「モーニング」の歌い方を工夫する。「音をたてて広がる」からだんクレッセンドした方が、広がる感じがする」とK子。「伴奏が滑らかだから滑らかに歌つた方がいい」とT夫。言葉だけでなく、歌い合って自分たちのイメージした歌に近づけていくところが素晴らしい。

教師は歌い方を指示するのではなく、生徒がイメージした歌に近づく、生徒がイメージした歌に近づくようにアドバイスをしたり、伴奏、指揮で歌声を高めていく。生徒一人一人の思いが一つの歌声となり、新しい「モーニング」の世界が広がっていく。

生徒のていねいな歌い方と豊かな表情に、自分たちで創りあげた歌という思いが感じられた。生徒に喜びと満足感を味わわせた授業であった。

牛田利吉 氏名 うしだりきち 生年月日 大正九年八月二十六日 住 所 舟越町本郷八十八一一



## 推薦する専門書

「たのしい音楽（教材・アイデア・授業づくり）」

国土社

# 学校自慢の木



ミカワクロマツ(矢南小)

▲ 明治天皇御大葬記念。「矢南の大松」として親しまれる。

私たちのふるさと岡崎市は、都市化が進んできたとはいえ、まだ市域に豊かな緑があり、自然環境に恵まれた土地である。

昭和四十八年、岡崎市は、「緑化推進都市宣言」を行い、緑を大切に守り育て、さらに、緑を増やしていくことを宣言している。昭和四十九年には、「郷土の名木」百本が選定された。この百本の中には、福岡小学校「土呂陣屋の松」と山中小学校の「リンボク」「ハナノキ」の三本が入っている。

市内の小中学校で、「学校自慢の木」というアンケートを実施させていただ



▲ 学区の地場産業を理解するために育てられる。



土呂陣屋の松(福岡小)

▲ 永禄7年、陣屋が置かれた時に植樹された市の天然記念物。現在は6本残っている。



ケヤキ(常磐中)

▲ 生徒の総意で選ばれた校木。朗読会など、さまざまな活動のシンボルとなっている。

ハナノキ(奥殿小)



▲幹の太さ 130cmの市内希有の大木。村積山を背景とした紅葉が美しい。

旗かけの松(大樹寺小)



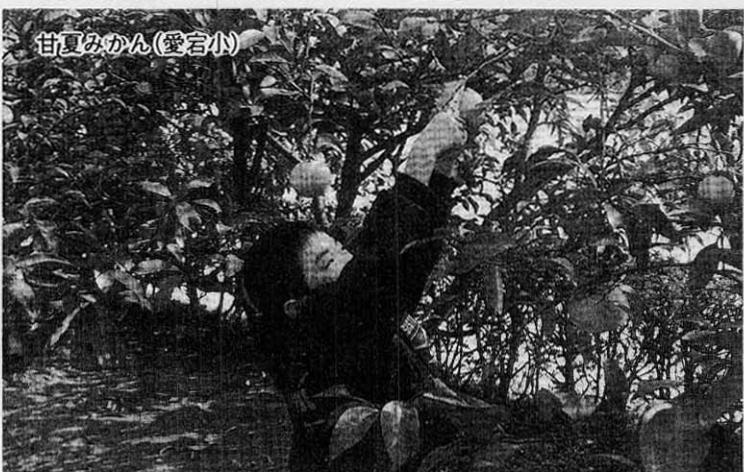
▲大樹寺の陣の際、「厭離穢土欣求淨土」の旗印を掲げたといわれる。

シラカバ(新香山中)



▲市内には珍しい20数本のシラカバが、ササユリ栽培園をとり囲む。

甘夏みかん(愛宕小)



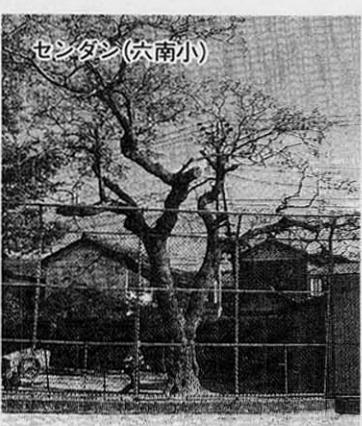
▲2月、色鮮やかな実が2000個余り。児童がみかん狩りを楽しむ。

イロハモミジ(梅園小)



▲樹齢80余年の大木。「カエちゃん」の愛称で親しまれている。

センダン(六南小)



▲開校時に植樹。地域の人々にも愛されている。

リンボク(山中小)



▲昭和4年、校舎新築記念として植樹。「郷土の名木」に選ばれる。

いたところ、明治天皇御大葬記念として植えられた、矢作南小学校の「大松」から、児童全員がみかん狩りを楽しむ、愛宕小学校の「甘夏みかんの木」まで、多くの木を紹介していただいた。木は、生命の尊さや偉大さを教えるよりもや潤いを与えてくれる。これらの学校自慢の木々は、今後も、各学校の児童生徒を見守り続けていくことであろう。

# ふれあい

自然の中で

大樹寺小 長谷川司吉

目的地での見学を終え、菅生川と矢作川の合流地点に着いた。長い道程を歩き、疲れが見え始めた五年生の子供たち。皆一斉に緑のじゅうたんに腰を下ろす。秋の遠足でのことである。

子供たちの目の前には、見えるはずの川原はなく、茂みが辺り一面に広がっている。

「今から探検だ。シャベルを出しなさい。」「もう疲れてだめだ。この先は気持ち悪くて行きたくない、という人はここで遊んでいてもよろしい。」この声で何人の子がついて来るかと思ったが、何と全員が腰を上げた。一列に並んで茂みの中を抜けると、ついに川原に出た。子供たちの目はキラキラと輝き、先程までの

疲れはいっどんに吹き飛んでしまったようだ。注意を聞くとわれ先にと穴を掘る。「やつたあ。先生、本当に水が出た。」「先生、こつちも出たよ。」「先生、来て。」

あちこちで歓喜の声が飛び、五人の教師は大忙し。チームティーチングで、五人の教師

が五年生全員を教えていた。どの教師にも、みんな笑顔で声を掛けてくる。

「先生、勝負しよう。」

今度は、投げた石が水面を何回跳ねるかを競い始めた。

今回、この自然とのふれあいの中、子供の本質とチームティーチングの価値を見た。

子供たちの目の前には、見



## 学びの原点

矢作北小学校

小倉 敏幸

理科主任二年目の六月のことである。S先生の「水や土のあたたかさ」の授業反省会に、校長先生が顔を出された。

「なんで、土の温度を測る授業なんですか？」

私は返事ができなかつた。

横柄になりかけている七年生には根本的な問い合わせがあつた。そして、戸惑いを覺せた。

私たちに、「学びの構造」と「知的好奇心」の二つの書を紹介してくださつたのである。

それまで、教師でありますから、学びとか分かるというこ

とをあまりにも知らなすぎた。

子供はなぜ学び始めるのか、教師は何を支援できるのか、

同僚と口論したり関連の書籍を買い求めながら、授業の場で児童の学びの姿を追いかける修業がようやく始まつた。

次の年の七月の週案の反省欄に、「授業反省：③賞賛に

有無。『学びの構造』中の動機づけとの関連」と記していることからしても、当時の私自身の問題意識は確かにそこについたと言えよう。

校長先生は、その間も多くの語ろうとはされなかつた。時おり、「ほだなあ」というなずかれるのが印象的であつた。教師自身が主体的な学習者であるべきことに気付くのを待つてみえたように思う。

校長先生は、その間も多くの語ろうとはされなかつた。

教师自身が主体的な学習者であるべきことに気付くのを待つてみえたように思う。

# 師弟同行



## 懐しい思い出

元梅園小学校長

萩野 富義

私は退職してもう十年になります。梅園小学校での三年

は、私がつとめて、定年といふ

厳しい現実が目の前に見えて

いた三年であります。四十

年という歳月は決して短いものではありませんが、大詰め

へきて「何を成し得たか」今

から「何が出来るか」と自問することからしても、当時の私自身の問題意識は確かにそこについたと言えよう。

先輩が築かれた「梅園の教育」を受け継ぎ、どの様に発展させるか、夜遅くまで話し合いましたね。この時常に私の脳裏から離れなかつた言葉は、芭蕉の「古人の跡を求めて、古人の求めたるところのものを探めよ」（当時校長室に掲げられていた）ということでした。模倣するのではなく古人の求めた精神を追及せよ、ということでしょう。

そしてたどりついた命題が「子どもが創る」授業、ということでした。子供の側にたつて教育を考えるという当たり前のことでしたが、そういう授業の実践は生易しいことではなかつたですね。そこで少しでも近い授業が出来るようについて、佐伯胖著『学びの構造』や波多野謙余夫著『知的好奇心』・『無気力の心理学』などみんなで読みましたね。今はとても懐かしい思い出であります。



・表紙写真  
・表紙詩  
・カット

愛宕小  
六ツ美北中  
深谷間井貞  
友一

現在、授業に木造校舎が使用されている学校は、小学校で井田小・羽根小、中学校で六ツ美中・福岡中ぐらいである。

特に、福岡中学校は、職員室をはじめとして校舎のほとんどが木造である。

一番古い校舎は、今でも理科室、音楽室として使われている。この校舎は、豊田市の拠点にあつた航空隊の兵舎を移築したもので、昭和二十七年に完工している。

さらに、管理棟と呼ばれる

長い間、多くの生徒を送り出した校舎も、近年傷みが激しく、全面移転が予定され、その務めを終えようとしている。

しかし、最近の新築、増改築される学校では、和室や木の温かさを取り入れた工夫が随所に見られ、新しい形で生かされている。遅かれ早かれ消えゆく木造校舎ではあるが、年に完工している。

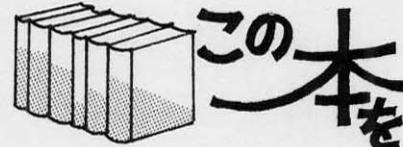
現在、授業に木造校舎が使

二階建の校舎は、昭年三十年に新築されている。



福岡中

## 木造校舎



*ヒトはなぜ夢を見るのか	千葉 康則
PHP研究所	¥1100
*男のための幸福論	諸井 薫
講談社	¥1300
*学校へ行きたい	高木俊一郎編
創元社	¥1500
*お母さんが話してくれた	柳澤 桂子
生命的歴史 1	岩波書店
	¥1300

### ※騎馬民族は来なかった

佐原 真

NHKブックス ¥ 830

自分たちの血は、実はユーラシア大陸の草原を駆ける騎馬民族のものである、という衝撃的な説を唱えたのは、江上波夫氏であった。

あれから4半世紀。佐原氏の「騎馬民族は来なかった」説が登場した。氏は、騎馬民族特有の文化である食習慣・犠牲等の多くが日本に存在しなかつた事実を挙げて、書名のような結論を導き出す。

広く人々の間に根を張る「伝説」を事実の光で正す作業が、読者を愉しませる。

おむすびは疲れた時程うまい。話も弾む。おむすびの不思議な効き目である。  
おむすびは、心を握り思ひやりを握る食物であり、母親の手は同時に心もあるのだ。人体の骨の四分の一に当たる五十四個が集まる手の有り難さと併せ、即物教育の貴重な教材としたい。

シ  
オ  
ス  
ア

赤トンボが町から消えたように、木造校舎も都市化の波に流されようとしている。無垢木材の机や椅子は希有といつてよい。温暖多湿の気候に合う日本建築が、珍しくなればなる程、在りし日の木造校舎で学んだ光景が懐しくまぶたに浮かぶ。

敷石の上を、ゆっくりと歩いて帰路につく。静かなたたずまいに響きわたった越天楽。耳から覚えて語り継がれてきた伝統芸能。洋式に変化している自分の体を突き抜けていく心地よい音色は、「そんなに急ぐな」と言わんばかりに、歩くテンポまでも変えていく。

時代の変遷を見つめてきた樹木は、今日も校庭に立ち、子供たちの心に潤いと安らぎを与える。

鉛なりの赤い実をつけたマンリヨウの木。手入れする子供の笑顔が清々しい。学校自慢の木は、学校のシンボルであり、代名詞でもある。

時代の変遷を見つめてきた樹木は、今